

メイドさんと
ご主人様



140文字日記

作 ARM1475



登場人物

・ご主人様

..... 28歳。いわゆるイケメン。職業は教師。私立皇南学院の中等部と高等部で美術の教師を務める。

良家の次男で芝浦にある高級マンションで自由気ままに一人暮らしをしていたが、両親から強引に住み込みで身の回りの世話をするメイド（A子）を送りつけられる。

好みは巨乳で顔や性格は二の次。基本、物事にあまりこだわらないサッパリした性格のハズだが何故かA子相手にツッコミが激しい。

A子が来て早々、部屋に隠していたマイ・フェバレット巨乳エロ本を焼き捨てられた事から「この女は敵」と認識している様子。

でもゲームの話になると意気投合するので何とか主従関係を維持出来ている。

ゲームが好きでヲタクの域にあるが、だが腕はいまいち。カッとなって壊した携帯ゲーム機は数知れず。

ゲーム好きだがエロゲーは苦手。自室で表情も変えずにエロゲーをプレイするA子に困惑する事もしばしば。

・A子

.....本名不明。というか名乗らないのでご主人様も知らないまま。

黒髪のロングヘア。小柄で三白眼、貧乳というか幼児体型。年齢も不詳だが、大学は卒業しているとの事。運転免許証によれば24歳。

才媛で勝ち気な性格。辛辣な口調故に、ご主人様と衝突する事もしばしば。

家事能力は完璧だが、限度を考えない行動が多く、無駄な料理を作ったりして失敗する事も。

体型コンプレックスから巨乳を敵視し、ご主人様の部屋で巨乳のエロ本を見つけてしまった事から「この男は敵」と認識している様子。

しかし、ご主人同様ゲーム好きで、ゲームの話になると意気投合する。それ以外でも割と最近では意見があっている様子。本質は実は似たもの同士。

コレクター的な面が強いが“集める”行為が目的である為、入手したゲームに対する執着力は意外にも無い。

その為、遊ばなくなったゲームはネットオークションに良く放出している。

またムツリスケベな性格で、エロゲーにも抵抗なく接する事が出来る。

・ B子

.....見かけは18歳。しかしその正体は400年も生きている猫又。

黒髪のロングヘアで、くるっとした瞳がチャーミング。巨乳で、ソレが原因でA子から敵視されている。

A子のサポートと称してご主人様の家にやってくる。.....が、どうやら主人であるA子の祖父から何やら言い渡されている様子。

猫らしく気まぐれな性格で能天気。メイドとは名ばかりで家事は苦手、不断は猫の姿でゴロゴロしている。

A子以上にスケベな性格で、初対面の日にご主人様を押し倒し、色仕掛けで言いなりにしようとするが、

逆にご主人様の霊格に負けてメロメロになってしまう。以後、隙あらばご主人様を口説こうとする困ったちゃん。

・ C子（たつこ）

.....秋葉原に居を構える八百万の神の一人「金屋子神（かなやご）」が、廃棄された電気こたつから作り出した付喪神（つくもがみ）。

舌足らずな口調で話し、屈託のない穏やかな性格は他人からも好かれる。一見可愛い男の子に見えるが実は.....。

・ 金屋子神（かなやご）

古くから秋葉原の路地裏に住み着いた、鍛冶屋の神様。表向き、好々爺の店主として、廃品回収した家電を修理して売っている。

ただし気に入った相手以外には売らず、しかも難問を出してから、という意地悪な面も。

A子の祖父とは古い知り合いらしい。





再び秋葉原編。

赤外線式コタツを求めて秋葉原を歩き回るご主人様たちだったが、どの家電屋も遠赤外線ヒーター式ばかり扱っていて、今や赤外線ランプ式は全くと言っていいほど売られていなかった。

「……もはやあれは昭和の遺物だな」

「これ以上探しても無いのでは？」

「やだー！あれがいいー！！うがーっ！」

B子は路上に転がってじたばたする。

「あんたはわがままな子供か……」

「駄目だこの女何とかしないと……ご主人様、どうします？ いっそヤフオクで買います？」

「ダメ元で来たジャンク通りでも扱っていないだろうなあ……って、あれ？」

ふと、ご主人様は路地の奥まった所に冷蔵庫を置いている店らしきモノを見つける。

「ちょっと観てくるか」

三人はその路地へ入っていった。

路地の奥にあったその店の中には、古ぼけた懐かしい家電が並べられていた。

「あ」

B子が思わず指した。

その先には何と、探し求めていた赤外線ランプ式電気コタツが鎮座していた。

「ご主人様！ あれ！」

「久し振りにみたなあ、あれ。……ん、よく見ると他にも懐かしいモノが色々あるな」

「何かお探しモノで？」

不意に声を掛けられ、三人は驚いて振り返る。
そこには背の低い、皺だらけの好々爺が立っていた。

「あ、実はこたつを……」

反射的にご主人様が答える。

「あれかい？」

老人はしゃくってみせる。

「再生品だけど、まだまだ使えるよ」

「再生品？」

「壊れた品や古い品を修理した奴さ。ここはそれを扱っている」

「再生品かあ。そういやさっき昌平橋のほう通った時にそういう店があったな」

「最近の奴は飽きっぽくてなあ、まだまだ使えるのに直ぐ捨てちまう。

直せば幾らでも現役だって言うのにな、へっへっ」

老人は自嘲気味に笑って見せた。

「アレ、探していたんです。幾らですか？」

A子が訊くと、老人は頭を横に振った。

「売ってるんじゃないの？」

A子はきょとんとする。

「いや、売り物さ。しかしこの店は趣味でやっててなあ、納得しないと売らん」

「……好々爺にみえるのに意外と偏屈ですね」

A子の耳打ちにご主人様は苦笑いする。

「どうしても欲しいのなら、条件がある」

「条件？」

「ワシの質問に答えて正解したらタダで良い」

「何このRPG的展開」

ご主人様が訊くと、老人は店内の右の壁を指した。

そこには小さなコップと、古ぼけたカンテラが置かれていた。

「一問目。そのコップは30cc、カンテラには50ccの油が入る。

カンテラを使うには40ccで充分。

その二つだけ使って40ccの油を用意してみなされ」

「え？あれだけで40cc？」

ご主人様は思わず瞠る。

「簡単な問題じゃないですか」

A子がにやりと笑う。

「30ccの油を2度カンテラに入れると、コップに10cc残る。

で、カンテラの油を全部抜き、その10ccと、

もう一度コップに満たした30ccの油をカンテラに入れれば、はい40cc」

「正解じゃ」

「良く判ったなA子」

ご主人様が感心したふうにする。

A子は無い胸を張り、

「バケツクイズの基本問題ですよ。

ダイハード3でもブルースウィルスが公園の噴水で難儀していたじゃないですか」

「そういやそんなシーンあったな」

「これであのコタツ貰えますね」

「一問目、と言ったろ。次は2問目じゃ」

「「えー?!」」

「2問目」

老人は今度は左側を指した。

そこには古ぼけた電子レンジがあった。

「あ、クク●ット」

「坂本九がCMで歌っていたアレか」

「ご主人様、流石に古すぎるソレは」

「そろそろいいかの？」

老人は咳払いをし、

「そのフタが閉まっているレンジの中にあるモノを、手を使わずに取ってみろ」

「手を使わずに取れ？ 何かのとんちか？」

「手も使わないで、どうやって扉を開けろというのです？」

「足を使えと？」

「そんな器用な真似出来ません」

ご主人様とA子が珍問に唸っていると、今まで黙っていたB子が突然前に出た。そして堂々と手を使って扉を開け、中から湯飲みを取り出した。

「チョットマテ」

A子が驚いた。

「アンタ今の話聞いてなかったの？」

「キイテタヨー」

B子は素っ気なく答える。

「イヤ、だから、手を使うなと...」

「正解だ」

「え」

老人のその言葉に、思わずA子はガン見する。

「イヤ、デモ、手を使って」

「いやいや、だから正解だ」

老人はニヤリ、と笑った。



端で呆気にとられているご主人様に、B子が怪訝そうな顔で耳打ちした。

「ご主人様。ちょっと厄介な相手に遭遇したようです」

「ど、どういう事」

「あの老人、私の正体に気づいています。——手ではなく、前足で取ったから」

それを聞いてご主人様はハツとなる。

「まさかこの老人...」

「人じゃありません」

「何……？」

「というか、この店と路地自体、異空間になっています。

迂闊でした、入るまで気づかなかった」

B子は険しい顔で老人を見た。

人では無いと言われた老人は敵意の欠片もない笑顔で、戸惑っているA子の相手をしていた。

「だから手を使わないで、と」

「いやいや、今のでいい。それでは最後の問題」

すると老人は唸った。

「うーむ。正解じゃ。問題出す前に答えられるとはな」
「え」

ご主人様、思わず固まる。

「え？こんな湯飲みがどうかしたの？」

B子は湯飲みをひょいと掴み、それでお手玉を始めた。

「ソレでお手玉すなあバカネコお！ そいつは
国宝級の品だあ！」

国宝級、の一言でB子も固まった。

すると宙に弧を描いていた湯飲みがゆっくりと落下していく。

「おおおお落とすなあ！」

「手前にあるその湯飲みだが……ん？」

老人が問題を出そうとするが、その湯飲みをガン見しているご主人様に気づいた。「

「若いの、どうした？」

「いや……そんな……バカな……？」

「その古い湯飲みがどうかしたんですか？」

A子が不思議そうに訊いた。

するとご主人様は息を飲み、

「この湯飲み……俺の記憶に間違いなければ……『曜変天目茶碗』によく似てるんだが…」

「ようへんてんもくちゃわん？」

顔面蒼白のご主人様の横をA子が駆け抜け、床に落ちる前に見事ダイビングキャッチして事なきを得る。

「おおっ……ナイスキャッチ」

「ご主人様、この湯飲みが国宝って……」

「見かけこそただの湯飲みにしか見えなくても、現在、世界中で日本に4点しか存在しない陶器と全く同じ造りをしていやがる。内側にある虹色の斑点でピンと来た」

「奇麗だろ？」

老人は自慢するように言った。

「奇麗は奇麗だけど、何でこんなモノを！？」

未だ正確な造り方すら分からず再現も難しいのに、
この湯飲みは完璧に曜変の仕上がりになってる……」

「ご主人様、詳しいんですね」

「伊達に美術の教師はやってないわい。爺さん、何でこんなモノを？」

「昔から使っていただけだが」

「昔、って……これ、作られたのは南宋の時代だぞ」

「南宋？」

「南宋時代、つまり12世紀だ」

「「え」」

A子とB子が思わず顔を見合わせる。

「南宋時代のある一時期、数えるだけ焼かれたもので、

さっきも言ったが現存するのは4点のみ。

これで5点目になるのか……いや、そうじゃない！

何でこんなモノが、こんな所にあるんだあっ！？」

ご主人様思わず絶叫。

「昔から使っていたんだから仕方ないだろ」

老人は意地悪そうに笑った。

「自分が使う分しか作らなかったからのう。

これ以外は世話になった奴に全部上げたが、もう4つしか残っていないとは寂しいのう」

「作った……だと？」

ご主人様は愕然とした顔を老人に向けた。

「これで全問正解。約束だ、あの子はお前にやろう」



と一とつですが郊外の山へハイキングに来たご主人様とA子。

「ご主人様、この看板、変」

「？ えーと、……『絶叫まで20分』？」

「絶景、の書き間違いでしょうか？」

「絶叫するほど凄い景色が見られるのかも知れない、面白そうだから行ってみよう」

「何か嫌な予感がするんですが……」

「大丈夫だって」

二人は案内のまま道を進むと、途中吊り橋を経て、渓谷の中にぽつんと突き出た岩山に着いた。

「……普通ですね」

「オンボロな橋の下を覗くと、確かに絶叫モノだったけどな……、あ、向こう側の崖から手を振ってる人が。地元の人みたい」

「おーい、あんたらが来た橋、さっき落ちたぞー」

二人とも思わず絶叫。



またまた秋葉原編。

国宝級の品を作ったという老人を見るご主人様の顔は、困惑に満ちていた。

「あんた……何モンだ？」

「ただの長生きジジイさ」

老人はニヤニヤと笑いながら言う。

不気味な言動の主ではあるがしかし、不思議と見ているだけで恐怖心が薄れていく。

これは別の意味で怖い相手だ、とご主人様は思った。

「ご主人様……いざとなったら……」

身構えるB子の目の色が変わる。

文字通り、可憐な少女の瞳が一瞬にして獣のような鋭い眼光をぎらつかせていた。

すると老人はやれやれ、と苦笑いする。

「嬢ちゃんも落ち付け。何も捕って喰ったりはせんよ。“いづな”の可愛い弟子を喰らうたら、あやつにワシが喰われてしまうわ」

「——何故師匠の名を？」

ご主人様はその名を聞いて、これ以上ないくらい瞠った。

「師匠って？」

A子が訊くがご主人様は何も答えず、老人をじっと見つめたままであった。

「もう“いづな”とはどれくらいあっておらん？」

「.....かれこれ10年は」

「あやつ、新しい弟子をとったと聞いてたが」

「俺が師事を受けたのはもう20年前ですよ」

ご主人様は全てを理解した様な顔で安堵の息を吐く。

「……だろうな。お主は別の道にいる様だし」

老人はうんうん、と頷いた。

「一体何者なんです？」

「物の怪なんざ足元にも及ばん。そう言えば分かるだろ、よく見ろ」

B子は老人をじっと見つめる。

そして閃き素っ頓狂な声を上げた。

「——“か・な・や・ご”!？」

「やっと気づいたのう」

老人は意地悪そうに笑いながら言う。

「ちなみにお主の主とは茶飲み友達でな、昔はここであやつと将棋をよく打ったモンだ」

「な、なんだってえ!？」

B子はMMRのナワヤの顔になって驚いた。

「ワシの馴染みの関係者が三人もこの近くに来ていたから、ちょっと悪戯したのさ」

「何が何だか分からないんですけど」

A子は一人置いてきぼりにされたような顔でぼやいた。

「.....本当に私のお祖父様と知り合いなんですか？」

「古すぎるくらいにつきあいでな、弦狼（げんろう）の倅のおしめをワシが変えてやった事もあるわ」

それを聞いてA子が嘔き出す。

「ななななんでお祖父様の名前をををを！！」

「つーかここだけの話だが」

好々爺の笑みが突然、黒くなる。

「お主のおしめも替えてやった事もあるぞ。
あと確か、6才の夏まで寝小便垂れて」

「はいだらあああああつつっ！！
」

滅多に動揺しないA子が奇声を上げてまで動揺するとはご主人様も予想外だった。

「……本物の“金屋子神”なのか」

「いかにも」

「まあ堅くなるな。

ジジイのお茶目に付き合ってくれた礼だと思ってくれればいい、おーい」

老人はぽんぽん、と手を叩く。

すると奥に飾られていた赤外線式電気コタツが飛び跳ね、あろう事か子供に変化してやってきたのである。

「な!？」

「いらっしゃいませ」

子供は三人の前でぺこり、と御辞儀した。

「コタツが人に変化したっ!？」

驚くB子。

その隣ではご主人様はお前が言うなと小声で突っ込む。

「直したついでにちょっと弄った。付喪神（つくもがみ）って奴だ」

「付喪神、って…」

「年季の入った品なら大抵宿ってるものさ。そんなに古いものじゃないから小僧ぐらいにしかならんかったが」

老人はけらけら笑った。

「便利じゃろ？」

ちゃんと躑けておるから、夏場に使わない時はおさんどんでこき使うといい」

「こき使うって……」

「よろしくおねがいします」

元コタツの子供は丁寧に御辞儀した。

「たつこ、といます」

「たつ、こ……？」

「あー、そいつは男だから」

「ややこしいなあ」

「……だめ、ですか？」

困惑するA子にたつこが傾げて訊く。

たつこはA子をじっと見つめる。

まるで怯える小動物の様な瞳に見つめられたA子は、ごくり、と息を呑む。

「だめ？」

「OK！」

サムズアップするA子の中で何かが弾けた様である。

ご主人様は肩を竦めて見せた。

「……ソレは兎も角、爺さん、なんでこんな所にいるんですか？」

「何で、言われても」

「長い事ブラブラしていて、たまたまここが空いていたから住み着いただけだが」

「神様がブラブラって……」

「世界には至る所に神がいるんじゃ、キニスナ」

鍛冶屋の神はかなり豪放磊落な主であった。

「ここは昔からジャンク品がゴロゴロしておってな、直し甲斐がありそうだから構えただけじゃて」

「ジャンクと言っても家電だけだ」

A子が突っ込む。

「大抵、金属が使われておるじゃろ。ならワシの範疇じゃ」

ご主人様は、確かに、と頷く。

「ここでな、気に入った奴に直したモノを譲ってやっておる。

弦狼とはソレで知り合いになった。あやつ元気か？」

訊かれてA子は、はい、と戸惑い気味に答えた。

「最近はご無沙汰だから、タマには将棋打ちに來いと言っといてくれ。

あやつ、なかなか筋が良いのでな」

神様に筋が良いと言われる A 子の祖父がどんな人物か、ご主人様は想像する。

フリーダムすぎる A 子の祖父で、猫又 B 子の主でもある、

と思った時、ご主人様はちょっと怖い想像になってしまった。

「ところでお主ら、これから予定があるか？」

「え、いや、コタツがこれで手に入れられたんですから帰るだけで」

「ヒマじゃろ？ちょっと付き合え」

「はあ」

ご主人様たちは困惑しつつ頷いた。

すると老人は店を出て、異空間との通路である路地をくぐり抜けて、現実のジャンク通りへと歩いていった。



ご主人様たちは慌ててついていく。

「こっちじゃよ」

右の方で手招きする老人を見つけて駆け寄る。

「どこへ行くんですか？」

「なぁに、ちょっと一服だ」

言われるままについていくご主人様たち。

まもなくある場所に到着した。

「ここだ」

「いらっしゃいませ、ご主人様！」

そこはまさかのメイド喫茶。

「いきつけの店で茶飲み話でもどうかと」

「ちょっとまで金屋子神。行きつけの店ってメイド喫茶か」

ご主人様は神様の言動に激しく突っ込む。

「堅い事ゆうない。浮世も悪くはないぞ、ほれほれ」

老人は愕然としているご主人様を無理矢理引っ張って入店していった。

慌ててA子たちも中に入っていく。

「お帰りなさいませ、ご主人様、お嬢様！」

元気の良いメイド店員たちの挨拶に迎えられ、一行は席に着く。

まだ戸惑うご主人様たちを尻目に、

金屋子神はメイド店員にケーキとお茶を注文し、その対応ぶりを見て鼻を伸ばしていた。

「……この爺、本当はジャンク目当てでこの町に居座っているんじゃないだろ」

「おいしくな一れ、萌え萌えきゅーん☆」

「おひよひよひよ」

老人は注文したケーキを持ってきたメイド店員のお約束事を堪能していた。

「.....何か神様の価値が大暴落している気がする」

「てゆーか本当に神様なんですか」

困惑する A 子が訊く。

「まあ、神様だという確固たる証拠が無いのも確かではあるが」

「おじーちゃん」

メイド店員の一人が液晶の割れた P S P を持ってきた。

「これ、弟が壊しちゃったの。またいつものやってくれない？」

「よろこんで」

老人は P S P を受け取る。

そして手刀一線、P S P をたたき割ってしまった。

「ちょっと!？」

驚くご主人様たちの目の前で何と次の瞬間、砕けた P S P が瞬時に元に戻ったではないか。

「おじーちゃん」

メイド店員の一人が液晶の割れた P S P を持ってきた。

「これ、弟が壊しちゃったの。またいつものやってくれない？」

「よろこんで」

老人は P S P を受け取る。

そして手刀一線、P S P をたたき割ってしまった。

「ちょっと!？」

驚くご主人様たちの目の前で何と次の瞬間、砕けた P S P が瞬時に元に戻ったではないか。

しかも元通りになったPSPは、割れた液晶までもが修復され、新品同様になったのである。

「ホレ、直った」

「わー、ありがとう！」

メイド店員は直ったPSPを嬉しそうに掲げた。

「おじーちゃん、アタシのケータイも」

「私、iPhoneの液晶の傷も直してー」

わらわらと、店員たちが壊れ物を持ち寄ってきた。

第221話

老人は次々と壊れた品を手刀でたたき割って即座に修復していく。

「きれいになーれ、もえもえきゅーん」

金屋子神、ノリノリである。

「凄いでしょ？」

呆気にとられているご主人様たちにメイド店員の一人が言った。

「あのおじーちゃん、ああやって直してくれるの」

「……ご主人様」

「イイかもシんない」

二人の脳裏には、自室に転がっている、うっかり投げつけて壊した数台のP S Pがよぎっていた。



第222話

「ご主人様、メイド喫茶に執事喫茶、妹カフェと、アレ系風俗が止まる事を知らないのですが……流石に“兄貴カフェ”だけは誰もやらないでしょうね」

「いや、わからんぞ。こっそり存在しているかも知れない。

店内がアスレチックジムで、プロテイン入り紅茶とか」

「湿度が高そうな場所ですね……嫌すぎる」

「それ、昔ワシが勧めた事あるんだけどね」

「マテやコラ鍛冶屋の神」

「流石に客層が合わないから、と苦笑いされながら断られたけど、
意外と当たるかもしれんぞ」

「そう言うのは新宿二丁目でやって下さい」

「かなやごさまー」

たつこが手を挙げた。

「“こたつかふえ”とかいうのはどうでしょう？」

「コタツカフェ……だと……っっ」

B子が思わず息を呑んだ。

「店内にコタツを置いて、その上でみんなで鍋を突くのか……ほう」

「それってただの居酒屋じゃ」

感心する老人の横でご主人様は傾げた。

「季節限定過ぎて単体の商売としては厳しいかも」

「しかし冬の企画としては使えるじゃろ。店長どうかね？」

老人はカウンターに居た、店長と思しき青年に声を掛けた。

「コタツカフェ、ですか？……それ、昔自分も思いついた事あるんですよ」

「やっぱし」

「でも、コタツにメイドという組み合わせがシュールすぎる上に、回転率悪そうなので諦めました」

「あー、そうなのう。コタツに入ったら誰も出なくなるわなあ」

メイド喫茶を後にしたご主人様一行。

「譲り受けたコタツが人のなりで歩いてくれるので持ち運びが楽ですね」

「そうじゃろそうじゃろ。使わない時には買い物にも付き合ってくれるしな」

「いやいやいや」

そんな時、苦笑いするご主人様の横に居たたつこが指した。

「あれ、なんです？」

そこには大人の玩具を売る店が。

メイド喫茶を後にしたご主人様一行。

「譲り受けたコタツが人のなりで歩いてくれるので持ち運びが楽ですね」

「そうじゃろそうじゃろ。使わない時には買い物にも付き合ってくれるしな」

「いやいやいや」

そんな時、苦笑いするご主人様の横に居たたつこが指した。

「あれ、なんです？」

そこには大人の玩具を売る店が。

「ヨイコハシラナクテイイバショダヨ」

「ご主人様何故口ボ語」

「キニスンナA子」

「なんか、さっきのおねーさんたちがきていためいどふくとかおいてますね。

あとみずきのぼすたーとか」

「いいからっ！よい子は黙ってスルー！」

「そいつは見かけは子供だが実年齢は」

「50です」

ご主人様思わず固まる。

「そりゃあ、年季の入った電気コタツですからね……」

A子は困惑した顔で言う。

「ワシも長い事ここにいるが、この店には今まで入った事がないのう」

「何そのワザとらしい言い回し」

「ご主人様は入った事無いんですか」

「いや、秋葉来てまで入る店じゃないだろ普通！」

「全然」

A子は頭を横に振った。

「まさかお前……入った事が……」

「お嬢様、不潔です！」

「何、笑いながらいいやがるこのバカ猫」

「えー、だって面白そうですしい」

「そう言う訳で、入りたい人手えあげてー」

さっ、と挙げられる4つの右手。

唯一拳手を拒んだご主人様に絶望の二文字がのし掛かる。

「そう言う訳で裏秋葉原編開始ー」



「ご主人様、ご実家から荷物が届きましたが……」

「おっ、兄貴の奴、今年も気を利かせて送ってくれたな」

「何ですのソレ」

「今夜が解禁のモノだ」

「え」

「あれ？今夜0時解禁と言ったら、ほら」

「でも、それ」

そう言ってA子は伝票の内容品の項を指す。

「“マーボー”」

「…兄貴相変わらず悪筆というか」

第231話

「ああ、ボジョレ・ヌーボーですか」

「日本は解禁最速だからな。

いつもこの日はこれで0時きっかりに封を切って……」

包装を解いて中身を見た瞬間、ご主人様が固まった。

「……えーと」

「最近のボジョレ・ヌーボーって豆板醤や挽き肉、豆腐で作られているんですかね」

中身はどう見ても麻婆豆腐の材料だった。

ご主人様は絶叫して携帯を掛けるが、相手にどうしても繋がらない。

「くそうっ、ワザと着信拒否してやがる！ どんだけええ！」

「愉快なお兄様ですね」

「不愉快すぎるわ！」

「なーんて」

そう言ってA子はもう一つ小包を取り出した。

「ちゃんともう一つ来てますよ」

「……これもマーボーになってる」

「あら」



「これなんですか？」

「あっ、それはコンドームです」

「あっあ、そうですか」

「お使いになられますか？」

「ま・さ・か！」

ごちーん。

「A子もB子も売り物で遊ぶな！」

「「ふえーい」」

ご主人様のげんこつ喰らってA子とB子は頭をさすっていた。

「しかしこんなに堂々と売られているというのは……」

第234話

「1階はそんな過激な物は売っていなかったのに、2階に上がった途端凄いモノがずらりと」

B子はそう言うと、棚に置いてあったピンク色のケースを取り出す。

「メイドの桃子さん……こんな缶ビールみたいな物がメイドですか？」

「可愛いキャラが書かれてるけど……伸縮性？貫通型？ソフトタッチ？」

「こっちは大砲の弾みたいな形してますね。……T・E・N・G・A？」

「オマエラそれ以上弄るなっ」

ご主人様は、売り物を物珍しそうに触っているメイドコンビを顔を赤くして叱る。

「何ご主人様顔赤くしてるの？」

「高々、オナホールくらいでウブな、ホホホ」

「オマエラ分かってて触ってるだろ！」

「しかしなんでそんなモノを知ってるんだよ」

「メイドとしてご主人様の下の世話も考慮するのは当然ですわ」

「お前、何か変なコト考えてるだろ……」

「ソナナコトナイデスワ」

ニヤニヤ笑うB子。明らかに何かよからぬ事を考えている様である。

「それにしても、男の人はこんなもので気持ちよくなるんですか」

「使った事無いから知るか！」

「じゃあ買いきましょう」

そう言ってA子は棚に並んでいたTENGAを、抱えていたカゴの中へ次々と入れていく。

「までいっ！買うとは言っとらんぞ！」

「私が買うんです」

「ぬう…」

「じゃあぼくもかう」

「までえいっ！」

棚に手を伸ばそうとするたつこをご主人様が止めた。

「つーかなんでこんな子供がこんな売り場に入れるんだよ！」

「そいつは付喪神だから、姿なんぞ幾らでも消せるぞ」

「いやいやいや止めろよ金屋子神」

「いやあここは面白いのう」

金屋子神はご主人様から目を反らして惚ける。

ご主人様、アダルトショップですっかり四面楚歌であった。

「誰かタスケテ……」

「何か男性用のばかりで、女性用のは無いんですね」

「いや、あるだろ……というか同じ場所に置かないだろ、
男女一緒だったら買う奴が恥ずかしがるわ」

「私、気にしてませんけど」

「ねー」

「黙れエロゲ脳コンビ」

「じょせいようってどんなのでしょうか」

「いや、よい子は知らなくて良いから」

「えー？」

「ディルドーとか言う奴だな」

「黙れ金屋子神」

「あと、電気マッサージ器を使うのもあるな」

「電気マッサージ器？」

B子が傾げた。

「コケシみたいな形で、頭が振動するものだ」

「振動、って、どうやって……」

「股間にだなあ」

「頼むからそれ以上はやめてくれええ」

ご主人様は頭を抱えてしゃがみ込む。

「股間以外にも乳首に当てたりとか」

「乳首？」

意外そうに聞くA子。

「乳首に振動を当てるのと言うと、乳牛の搾乳機がそんな仕組みだった様な記憶が」

「うむ。乳首を覆うカプセルで振動を作って刺激を与えて搾乳するんだったな」

「そういやこれ、そのカプセルに似てますね」

A子はTENGAを指した。

「これも射し込んで刺激を与えるんですよね」

「成る程、これは男のミルクの搾乳……」

ごちーん。

B子は言い切ろうとした時にご主人様に小突かれた。

「いたーい。ご主人様なにすんのお」

「黙れこのオヤジギャル」

「でも結構でかいですよねコレ……」

A子はご主人様の股間を見た。

「失礼ですが同じサイズ？」

「恥ずかしながらそんな巨根ではありません」

「いや、それでも……」

B子はぼそっと呟く。

「ていうか、そんなでかい奴なんておるかっ！」

「確かに、こんなの入りません……」

思わず息を呑むA子。

「しかし赤ん坊はソレよりでかいサイズで出てくるだろ？」

金屋子神の指摘に一同思わず固まる。

「確かに……」

第244話

「と言う事は、女性はこんなでかいのを入れるコトが出来るのでしょうか」

「男に聞くなよ……」

「あんたは？」

B子は急に振られて戸惑う。

「いやぁ……あたしらの場合はソレよりももっと厄介だし…」

「？」

A子は傾げる。

小声で、ああ、と頷くご主人様は、オス猫のペニスがトゲトゲな形状になっている事を思い出した。

第245話

「ご主人様、コレ見ててバターナットを思い出しました」

「バター納豆？」

「漢字じゃねーし。ナット、です」

「ナニソレ」

「カボチャの仲間です」

そう言ってA子はネットブックを取り出し、画像検索結果をご主人様たちに見せた。



「こいつをどう思う？」

「凄く……大きいです」

「つーか何この猥褻物」

「カボチャと言うよりヒョウタンだな」

金屋子神が覗き込みながら言う。

「私も最初はそう思いました。

確かにヒョウタンもバターナットもウリ科の野菜なので、似てて当たり前なんですよ」

「しかしこれ、ヒョウタンより露骨……だな」

「本当、チンコそっくりだー」

「黙れバカ猫」

「んー」

B子は唸った。

「そういや昔から代用品でキュウリとかナスとか使われていたよねー」

「いやいやいや露骨に“使う”言うな」

「ちなみに」

A子は咳払いし、

「割ってみると丁度“タマ”の所に種があるんですよ」

「神様は分かっててやってます」

「マジか金屋子神」

「はっはっはっ、嘘じゃ」

「よく考えるとウリ科って結構アレな印象がありますよね」

「アレいうな。仮にも食い物だぞ、そんな事言うな」

「想像して見て下さい。ナスやキュウリをくわえ込むご主人様の姿を」

「……A子、一度本気でしばき倒すぞ」

「うっ」

突然たつこが顔を赤くして鼻元を押さえて呻いた。

「たつこ何故お前鼻血出す」

「つい……」

「つい、じゃなくて！よい子はそんなアレな想像しちゃいけません！」

「学校の先生みたいだのう」

「実際に先生ですから！」

「じゃあ、そのバターナットを舐め合うその娘二人を想像してみるとか」

「もっとアウトっ！」

「うっ…」

たつこはもう一度鼻を押さえる。

「駄目だこの子何とかしないと」

「でもたつこって赤外線電気コタツの付喪神なんでしょ？赤くなって当然かと」

「誰が上手い事言えとA子」

「ちなみにそいつ、足フェチでもあるんじゃ」

「かなやごさまー」

たつこが困ったふうにする。

「ぼくはあしをあたためるのがすきなだけで、なめるくせはありません」

「舐められたら堪らんオイ」



「さて、ついに禁断に女性向けコーナーに来ましたね……ご主人様逃げるな」

「B子さんもう勘弁して下さい……」

「つか」

A子はフロアを見回す。

「……大人の玩具売り場と言うより家電コーナーっぽいんですがここ」

「電動マッサージ器がこんな売られているとはのう」

金屋子神は少し呆れ気味に漏らした。

「疲れを癒やすというという意味では正解かと」

「いや疲れるから！」

「試してみます、ご主人様？」

A子は手に取った電動マッサージ器をご主人様に差し出した。

「ちょ、おま」

「肩凝ってるんじゃないんですか？」

「.....精神的に疲れてます、ハイ」

「ナニコレ、携帯のストラップに使える電マもあるしー」

B子はストラップ型小型電動マッサージ器を掲げ、

「ぱらっらっぱらー♪ どこでもオナ……」

ごちんっ。

「また叩くう」

「お前は少し慎みをだなあ……」

「なんかでかいのがありますね」

たつこが指した棚の上には、とても人間サイズとは思えない巨大なディルドーがチン座していた。

「って、カタカナで言うなあっ！」

「……世の女性はこんなモノを使うんですか？」

思わず息を呑むA子。

「……俺、メガテンの『マーラ様』思い出した」

「奇遇ですね、私もです」

ご主人様とA子が連想したのはコレの事である。

<http://bit.ly/dHKjpa>

「あれはよく審査通ったよなあ……」

「初めて見た時はなんてチャレンジャーだと思いました」

「しかしこれ、ナニに使うんですか？」

「.....どっちの“ナニ”かねB子クン」

「ご主人様考えすぎ考えすぎ」

「売り物である以上、入る人もいるんでしょうね」

「.....コレも買う気かA子？」

「こめかみに血管浮かべながら凄まないで下さい。

つか買いませんよも、こんなおっかないモン」

するとご主人様、それをいきなりつかみ取り、

「よし、じゃあ買う」

「ぶうっ！」

「ご主人様が壊れた……」

「なんじゃ、おまえらはこんなモノ使うほど激しいのか」

「んな関係じゃないわい金屋子神。ボケたら小突くのに使える」

「えー」

「やっぱりご主人様壊れた……」

A子とB子は呆れた。

「……あー、でもあんなんでやられたら……激しく……あん」

「何コイツキモイ」

悶えるB子に、A子は少し引いた。

「しかし何つーか」

金屋子神は辺りを見回す。

「電マ以外にも、張形（はりこ）がずらりと並んどるの」

奥の棚には、勃起した男性器の群れが天井を睨み付けていた。

「俺、ここにこれ以上いるとSAN値が失われていく気がする……」

ご主人様は溜息を吐いた。

「もう用はないので上のフロア行きましょう。衣装売り場らしいです」

メイドさんと
ご主人様の
140文字日記

「……A子エ」

「なんですか？」

「……何で俺たちはここに並んでいる？」

ご主人様の疑問が白い珠を紡ぎ、夜の帳に消え入る。

現在12 / 1 午前零時。

場所は秋葉原ヨドバシ前。

当然シャッターは降りている。

「今日はMHP3の発売日じゃないですか」

「いや、だから」

「買う為に並んでいるんじゃないですか」

「だからねえ……」

「ハイご主人様、生命の粉塵」

「お、さんきゅー……って、いや、だから」

「そっち、ミラボレアスの尻尾が迫ってます」

「おっと、危ない……、いや、だから」

「モンハンは大人気ですからね、予約だけでミリオン行ってるんじゃないんですかね？」

「いや、そうだろうけど、でも、なあ……」

「何、不満そうに言ってるんですか」

「実際不満だよ！ 大不満だYO！

何で俺がここでモンハン買うのに並んでなきゃならないんだよ！」

「予約していないのが悪いんです」

「それはお前だよ！俺はとっくにここで予約済みだよ！

後は仕事帰りに取りに行くだけだよ！

何で予約してなかったんだYO！」

「だって面倒だったしー」

「外出るのが面倒だったからか？ Amazonでも通販サイトでも注文出来たろ！？」

「んー」

A子は眠たげな顔で後頭部をかきながら、

「大丈夫だろうと思って油断してました」

「正直なのは良いけどSA！苛つくよソレ！」

ご主人様ブチ切れモード。

「ご近所迷惑ですよー」

「マイペースってレベルじゃねえええ！」

「ほらご主人様、頭部破壊のチャンス」

「よし拡散弾！やった破壊成……」

ご主人様、PSPを掲げてガッツポーズ。

「——までえいいっ！ 俺は今日仕事なんだよ、こんな徹夜で並んでられないんだよ！」

「別に一緒に並んで下さいとはお願いしていませんが私は」

A子はチカチカ光るPSPの画面を見つめたまま、一瞥もくれずに言う。
それを見たご主人様は呆れ顔で溜息を吐いた。

「……あのなあ。

女の子に、こんな夜中の寒空の下へ一人で居させる訳にはいかないだろうが」

「なんだかんだ言って付き合い良いですよね」

「うるせえ、ほらミラの奴そっち行ったぞ」

「了解」



第264話

アダルトショップの最上階に着いたご主人様たち。
そこは衣装、下着売り場になっていた。

「何だこの下着……肝心な所が割けて丸見え……」

ご主人様は見た事もない下着の山に愕然としていた。

「マジで俺のSAN値無くなりそう……」

「ご主人様」

不意に、背後からA子が声を掛けてきた。

「着替えてみました」

ご主人様と金屋子神が振り返ると、そこにはこの売り場で売られているコスプレ衣装を試着したA子たちがいた。

A子とB子は、有名18禁恋愛ゲームのヒロインたちが着るカラフルなセーラー服に身を包んでいた。

B子はご主人様たちの前でくるりと回って見せた。

「どう？ 似合う？」

B子は嬉しそうに訊いた。



「馬子にも衣装」

ご主人様は素っ気なく答える。

「何？ こういう衣装嫌いなの？ 男だったら喜ぶでしょ？」

「いや、ピチピチの現役を毎日生で見てるから」

「あ、学校の先生だったっけ」

「それよりも」

ご主人様は二人の隣に立つたつこを指した。

「何故着替えさせる」

そこには体操服にブルマ姿のたつこがいた。

「何故ブルマ」

「似合うじゃない、ねー？」

B子は笑顔で訊いてみせる。

たつこは恥ずかしそうな顔で俯いたままだった。

「似合う以前にたつこは男の子だろ！A子も止めろよ！」

「チョイスしたのはお嬢様ですが」

「つい、うっかり」

「待ていお前らああ！」

「これはこれで悪くはないのう」

「金屋子神自重！」

「それにしてもこの派手なコスプレ衣装の山は……」

「一昔前だったら、この手のショップのコスチュームは、看護婦とかバニーガールとか、

その手のシチュエーション物ばかりだったんだがのう」

「詳しいな、とかそういう事はもう突っ込まない事にする」

ご主人様は溜息を吐く。

「つか学生服っぽいものばかりって……」

「エロゲーのヒロインの衣装ばかりですね、例えばコレは……」

A子は次々とその衣装の元ネタであるエロゲーのタイトルを列挙していく。

「詳しいな、とかつっこまんぞ。つーかそれ、お前の部屋で見かけたモノばかりだなおい」

「最近は女性もエロゲーマー多いですから。

ヒロインの衣装を着たい人も少なくないでしょう」

「そんなものか」

「現に私が不断着ているメイド服はメイドさんがヒロインのエロゲーが元ネタです」

「おいしい」

「しかもコスパで注文した特注品で、結構値が張りました」

「.....ちなみにいくらだ？」

「10万」

思わず吹き出すご主人様。

「.....市販品のを買った方が安かないか？」

「.....私のサイズが無いんです」

「済まん」

「ちょっとしたオーダーメイド服だろうなあ、メイドだけに」

そう言って金屋子神は独りクスクス笑う。

しかしご主人様たちはガン無視。

「これはガ○ダムの連邦軍兵、そっちはジ○ンの軍服だな、女性士官の」

「個人的にモンハンの衣装なんか欲しいんですけどね」

「アイルーか」

A子はご主人様の足を蹴った。

アダルトショップから出てきたご主人様一行。

何故かご主人様の両手にはパンパンに膨れあがった店の紙袋が。

「何もここで衣装買わなくても……」

「こういう店にはなかなか来る機会がないので、つい」

「前から言ってるが、限度ってモノをだなあ……」

「でも結構面白かったじゃない？」

「気楽に言うなB子……」

第273話

「とりあえずコタツ手に入ったからそろそろ帰るか」

「おう、もう帰るのか」

「とりあえず礼は言っておきます」

ご主人様はたつこをちらっと見て、

「……で、こたつ使う時はなんかおまじないでも」

「たつこに言えばコタツになる。ところでお主、ちょっと耳を貸せ」

金屋子神がどこか険しい顔で手招きした。

「何？」

ご主人様は言われるままに耳を寄せた。

「お主んとこの嬢ちゃんだが……気づいているのか？」

「気づく、って？」

「人じゃない」

「B子の事？」

「違う」

その言葉にご主人様の顔が強ばった。

その瞳は、心配そうな顔をする金屋子神の顔を映していた。

「……気づいていたようじゃな」

「あんた……何が言いたい？」

金屋子神はA子を気取られぬ様、ちらっと見る。

「正確には、“あのお嬢ちゃん”が、という訳ではないがな。
ただお主にとってちょっと厄介な事態を招くかも知れん」
「……」
「もし面倒な事になったら遠慮無くワシの所に相談に来い。
いづなの弟子と言う事はワシの弟子も同然だからな」

金屋子神は笑った。

帰宅したご主人様たち。

和気あいあいのA子たちとは対照的に、ご主人様は険しい顔のままだった。

「ご主人様、あのじーさんに何か言われたの？」

B子だけがその様子に気づいていた。

「いや……」

ふと、ご主人様はB子に質問しようとした。

しかしそれは口にはせず、

「疲れた」

「さよか」

B子は察した様であった。

「いやマジで疲れたあ」

「寒かったからねえ。たっちゃん、コタツになって見せて」

「わかりました」

ドロン、と言う音とともにたつこは居間で赤外線式電気こたつになった。

「コタツ布団は？」

「ボクだけです」

たつこが済まなそうに言う。

「ご主人様、余っていた布団持ってきました」

「仕事早いなA子」

早速ご主人様が布団を掛ける。

「コンセントも入れました」

「じゃあ、スイッチを……」

ご主人様が電源コードに付いているスイッチを入れた。

「あれ？」

コタツでススタンバっていたB子が傾げた。

「あんた何先にコタツに入ってるのよ」

「電気入ってない」

「え」

驚いて布団をめくると確かに点灯していなかった。

「え？ 直したって金屋子神のじーさん言ってたよね」

「たつこ、どういう事？」

「ボクにもわからないです……」

「赤外線の電球が切れてるのかもなあ」

「どうする？」

訊かれてご主人様は唸った。

「どうすると言ってもメーカーに修理は出せないだろ流石に。

あとで金屋子神に相談に行くか」

「ごめんなさい……」

コタツはたつこの姿に戻り、済まなそうに頭を下げた。

「良いいって良いいって。貰うって言った以上、うちの子だからねー」

「いつからアンタの子になったのよ」

調子の良いB子に、A子が突っ込んだ。

「暖房はあるし、それに部屋も広いから一人くらい増えたってなんてことはないさ」

「ありがとうございますごしゅじんさま」

たつこはやっと笑った。

「しかし寒いな」

「室内暖房が効くまで風呂にでも入ってて下さい」

「お、そうだな。たつこも来いよ」

「はい」

「ご主人様、たっちゃん可愛いからってお風呂でエッチな事しちゃダメですよ」

「誰がするかい」

B子にからかわれてご主人様は呆れる。

しかし不意に先ほどのブルマ姿が過ぎり、慌てて頭を振った。

たつこがA子と一緒に1階のコンビニで子供用下着を買いに行ってる間、ご主人様は先に湯船に浸かっていた。

「ふー。良い湯だわ」

「おくれましたー」

「おう、良い湯だぞ、入ってこい」

「はい」

ガラッと浴槽の戸を開いて、裸のたつこが現れた。

「え」

それを見てご主人様は思わず固まった。

「え？え？」

次の瞬間、ご主人様の悲鳴が轟いた。

「ご主人様、あれほどたっちゃんに手を出すなと言ったでしょ！」

「何だその笑い顔わ！」

笑いながら真っ先にやってきたB子にご主人様は突っ込んだ。

「いや、そうじゃねえ！ そうじゃないんだ！」

「だからどうしたと」

「無いっ」

「はあ？」

「だから、無いんだよっ！」

次の瞬間、B子の悲鳴が轟いた。

「B子、あれほどご主人様に手を出すなと言ったでしょ！」

「A子、何でお前まで笑いながらやってくるっ！」

「いえ、この間プレイしたエロゲーのシチュエーションにそっくりだったんで」

「知るかっ！ つーかお前気づいていなかったのか！」

「はあ？」

「たつこにチ○コが付いて無いっ！」

次の瞬間、A子の爆笑が轟いた。

「何故笑うー」

「いや、まさかとは思っていたんですよねえ。

体操着に着替えさせた時、モッコリしていなかったのよ」

「あの……どういことですか？」

裸のたつこが不思議そうに訊く。

「たつこ、お前自分が女の子だって事気づいていなかったのか？」

「え」

たつこが目を丸めた。

「ついてない」

B子がたつこの股間を指した。

言われてたつこは自分の股間を掌でパンパン、と叩いてみせる。

「おとこのひとってここになにかあるんですか」

「マジだ」

「マジですね」

「マジでたつこ男女の区別が付いていなかったのか……」

愕然となるご主人様たち。

「金屋子神はたつこにどういう教育をしたんだ……」

「そういう訳で」

A子の横には、A子のお下がりのメイド服を着たたつこが立っていた。

「考えてみればコタツに裸で入るアホなんて居ないからなあ……」

「変態紳士ならやるのでは」

「英国にこたつがあるならな。しかしどうしたものか……」

「ボク、ひょっとして知らないこなんですか？」

たつこが涙ぐんで聞いた。

「要らない子なら私のお下がりなんて上げません。

「そうですよねご主人様」

「ま、まあ……」

「赤外線の球が点かなかったのは、タマがなかったからって事か」

「誰が上手い事を言えと以下略。……金屋子神の爺いめ、知ってて譲ったと思えるわ」

「そういう訳でたっちゃんにはメイド3号、C子の名を与えます」



「……」

「何、不安そうな顔してんのたっちゃん」

居間で不安げな顔で立っていたC子を見つけたB子が声をかけた。

「……ごしゅじんさまとA子さん、さいきんおへやからでてきませんね」

「あー」

B子はその理由を知っていた。

「確か、もんはん、とかいうゲームに夢中になってるんだろうねえ」

「もんはん？」

「怪物を狩るゲームとか。やった事無いからわかんないんだけど、流行ってるらしいからねえ」

「それででてこないんですか」

「しばらくこんな調子じゃないの？」

お嬢様、昔出た奴だと一週間も部屋から出てこなかったしー」

「ふけんぜんですね」

「あはは」

「誰が不健全じゃ」

「あ、ご主人様」

「俺はモンハンじゃなくって、使っているパソコンのセットアップで籠もっていただけだ」

そう答えるご主人様の顔は、どこかやつれていた。

「パソコンが壊れたの？」

「いや、ボーナス出たからOSをXPから7に変えたんだが、データの移動に手間取ってなあ……。

動かないソフトもあるしいい加減疲れたわあ」

「A子さんもパソコンなんですか」

「いや、あいつは純粹にモンハンだと思う」

確かにA子の部屋から時折、妙なかけ声が聞こえていた。

「メールのデータやアドレス、ブックマークの移動から使っている辞書の移動とか、結構手間かかるんだよなあ……」

「アップグレード、とか言うのは楽じゃないの？」

「いや、俺は新しいハードディスク買ってきて新規にインストールした。

引き継ぎでトラブル起きると致命的だしなあ」

「そうなんですか」

頷くC子ではあるが、その困ったような顔は明らかによく理解していないようである

。

「使えないソフトとかもあったりして、通常営業に戻るのもう少しかかりそうだ」

「まあほどほどにねー。

根を詰めて身体壊したらシャレにならないし」

「ご忠告痛み入る。でもそれはお前さんのお嬢さんに言ってやれ」

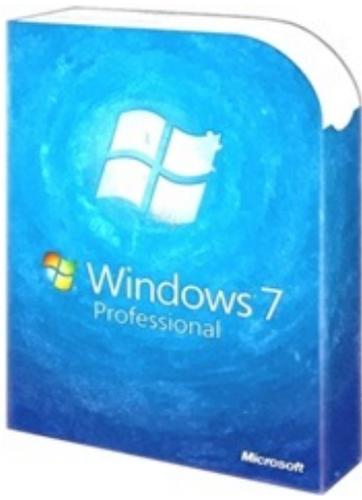
「おっしゃー！逆鱗デター」

まるで呼応するようにA子が歓喜の声を上げた。

どうやらレアアイテムをゲット出来たようである。

「あはは……」

B子は呆れ気味に苦笑した。



＼みなさん、聖☆性夜／

ゴチン☆

「いったーい、ご主人様何すんのお？」

「何じゃその挨拶はっ」

「いや、だって」

B子は外の夜景を指し、

「遠くに見えるホテルの窓の灯の数だけ盛っているカップルがいると思うと、
もうじっとしていられなくって」

「……俺はこんな下品な猫又は見た事無いわっ」

「つーかご主人様、こんな日だというのに何故自宅にいるのです」

「聞くな……」

ご主人様、ちょっと疲れ気味に俯く。

「ご主人様はリア充でイケメンの部類に入るのに、彼女の一つもないんですか」

「悪かったなっ」

「何でしたらあたしが一晩お付き合いしてもいいんですよ」

「猥褻はもう勘弁してください」

「何ならお嬢様でも誘えば良かったのに」

「無理」

ご主人様はA子の部屋を指した。

「新しいモンハン買って以来、ずうっと引きこもってるし」

「実家でも新作が出る度、クリアするまであんな調子でしたねえ」

「まあこんな日くらいはゲームやらずに出てくれば……」

その時、A子の部屋の扉が開かれた。

部屋の中から、すっかりやつれたA子がPSPを両手に持って現れ、おぼつかない足取りでご主人様たちの元へやってきた。

「ど、どうしたっ」

「……クリア……した」

ボタン。

A子はそう言って倒れ込んだ。

「うおおいっっ！ 廃人ってレベルじゃねえぞっ！」

驚いたご主人様はA子を抱えて部屋に戻した。

2時間ほどしてA子は目を覚ました。

「あれ。ご主人様？」

「やっと目を覚ましたか」

ベッドの横にいたご主人様は呆れつつ、どこか安心した笑みを浮かべた。

「お前なあ、ひょっとして徹夜でプレイしていたのか？」

「最後の奴がなかなか倒せなくて」

「まったく……」

ご主人様はため息をついた。

「ゲームは一日一時間って言うだろが」

「H A H A H A」

「只でさえ体調を崩しやすい時期なんだし、こんなので無茶するなよ」

ご主人様は溜息を吐いた。

「.....すみません」

A子にしては珍しく素直に謝った。

体力が低下しているのですっかり弱気になっているのであろうか。

あるいはご主人様のその表情に何かを感じたのであろうか。

「とにかくだ。これからはこんな無茶はするなよ」

「はい」

「あと、だ。良い知らせと悪い知らせがある」

「え」

「先にどっちを聞きたい？」

「良い方を」

「今夜はクリスマスイブだ。

お前さんがこんな調子だから、料理とかは全部俺が用意した。豪勢なディナーだぞ」

「わーい」

A子は横になったまま小躍りした。

「今年は喧しいのが3人も増えたからな。ちょっと奮発した」

「ちなみに去年のクリスマスは？」

「仕事で遅くなったから二郎三田本店でヤサイマシマシを……って喧しいっ」

「それはそれとして、悪い知らせの方は？」

するとご主人様は、さっきまでA子が持っていたPSPを差し出し、

「お前が転けた時に壊れた」

「オアーッ！！」

ベッドの上で絶叫するA子。

「心配するな、モンハンのUMDもメモステのデータも無事だ」

「この家ってPSPが壊れる呪いでもあるんですかっ！」

「知るかっ」

ご主人様は苦笑いした。

「無茶した罰と思え」

「うえええ」

「はいはい泣くな泣くな」

そう言ってご主人様はリボンの掛けられた箱を取り出した。

「なんスカ？」

「クリスマスプレゼントだ。晩飯食ってから3人に渡そうと思ったが、
とりあえずお前さんには先に渡す」

「はい」

「泣いたカラスがもう笑ったか。現金な」

「貰えるモノは貰うのが私の流儀です」

資産家の娘とは思えないセコさにご主人様は苦笑いする。

A子はためらいもなく箱を開けた。

「……なんスカコレ」

A子は箱の中身を観て固まった。

「嬉しいだろ」

「イヤ、この流れだと新しいPSPとかじゃないんですかっ！

どう見てもこれ懐かしのリンクスじゃないで
すか！」

「レアだぞ、しかも未開封」

「どこから見つけてきたアンタッ！」

「馴染みの喫茶店のマスターが物持ちが良くてねえ」

「物持ちが良いってレベルじゃねええ！」

「イヤ、確かにレアすぎてヤフオクで出品したら、好事家が喜んで食いつきそうですけどね！」

A子にしては珍しくツッコミが激しい。

「ていうかコレ持ってますよあたしもっ！」

「そういやそうだったな！」

ご主人様は笑いながら、新しい箱を差し出した。

「冗談だ、ほれ新しいPSP」

「あ……」

A子の目が輝いた。

「ナニコレ、ハンターズモデルじゃないですかっ！」

「クリスマスプレゼント用に買っておいたんだがな。……俺用に」

「自分用かいっ」

「まあちょうど良いと思って。どうだ」

「わーい、さんたさんありがとー」

「棒読みで礼を言うな」

「冗談です」

A子は起き上がって頭を下げた。

「サボっていたのに済みません……」

「いつも世話になってるからな、気にすんな」

「あのう」

そんな時、部屋の外で様子を窺っていたらしいB子とC子が呼びかけた。

「おう、A子ならもう大丈夫そうぞ」

「それはよかった」

C子がほっと胸をなで下ろす。

「起きるまでご馳走お預けだったしねー」

「食い気しかないのかい」

ご主人様は呆れ気味にいう。

「だって旨そうだし」

「ボクもおなかが……」

「ハイハイ」

A子はベッドから起きた。

「大丈夫か」

ご主人様はまだふらつくA子の手を取った。

「ちょっとお腹が」ご主人様は思わず笑った。

「それじゃあ、みんな」

M e r r y C h r i s t m a

s ≡ ☆





第7巻へつづく

メイドさんとお主人様の140文字日記 第6巻

<http://p.booklog.jp/book/22131>

著者 : arm1475

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/arm1475/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/22131>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/22131>

画像素材は一部以下のサイトより規定の下引用、加工しております。

- ・ 無料街写真素材 東京デート

<http://www.tokyo-date.net/>

- ・ EyesPic - フリー画像素材

<http://eyes-art.com/pic/>

- ・ 写真素材 足成

<http://www.ashinari.com/>

本編キャラクター画像は以下のソフトで作成いたしております

- ・ 「コミP o !」 (株式会社ウェブテクノロジー 製品)

<http://www.comipo.com/index.html>